



もらい 隋 ちる し か ない

【新装版】

Contents

- ① 生殖召喚獣 005
- ② デーモン・ガール・ハント 021
- ③ ベトレイア 037
- ④ 豊胸薬の為ならば 057
- ⑤ ツマカセ 077
- ⑥ Re Spawn 097
- ⑦ 救いのない世界 117
- ⑧ ハメ撮り療法 137
- ⑨ 魔術師リーゼロッテの受難 158
- ⑩ おまけ漫画 250
- ⑪ あとがき 254

—お忙しい所失礼する
守護騎士クロード殿

昨今頻発している失踪事件だが…
強力な魔法使いの仕業だったようだ

数刻前 奴の住処に
討伐隊を派遣したのだが
全滅してしまった…

この件 我等の手に余る問題であった

…今更ではあるが
どうか力を貸していただきたい

…わかりました
これ以上犠牲を出すわけにも
いきません

すぐにでも討伐に向かいますわ

ふう…

ハヤ.

……
もう随分と奥にきたけど……

魔法使いは
一体どこに……

ん？あの部屋……

生殖 召喚獣

せいじよくしやうかんじゆう

まさか
失踪した娘達……？

なつ……!!
これは……

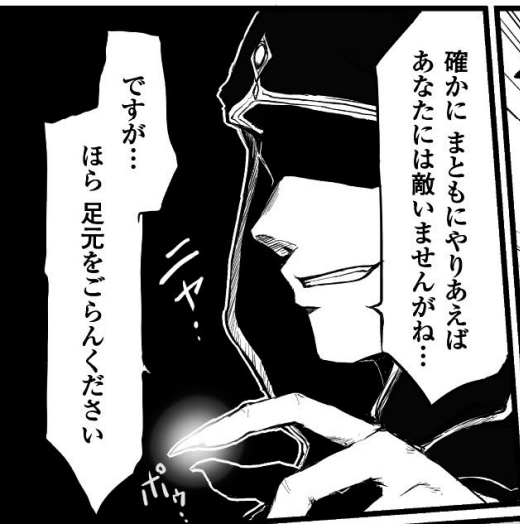


やあごきげんよう
守護騎士殿

いい実験日和ですな



何…ただ耐久実験を
しているだけですよ



確かにまともにもやりあえば
あなたには敵いませんがね…

ですが…
ほら足元をごらんください



貴様がこの娘達を…

到底許せぬ悪行…!
おとなしく討伐されるがいい!



はっ…?

ししまっ…

くっ…

…これは触手…召喚…？

ちっ

娘達に取り付いていたのと同じものか…

丁度あなたのような強い方を待ちしていたんですよ

一般人では過酷な実験には耐えきれない方も多いですからねえ

…
黙って聞いていれば…
こんなもので
私を捕らえていられるとでも？

うぐっ…
うぐっ…

この程度のモンスター
すぐに振りほどいて…

ゴオオ

おっとそうはいきませんよ

!?

ここらじい…
何をして…っ…

うぐ

ぐち…

いやっそこは…

ねち…

ねっ
ねっ

もぞ…

こいつは媚薬を
分泌する触手です

……

そろそろ実験を
はじめましょうか…

あ……!?

か体が…

こいつに攻められれば
あなたも力を
發揮できないはずだ…

あっ?

いやあ…
入って…

すにか…

ちゅっ

ねっ

ヒクッ

ヒクッ



あなたには私の召喚生物で
孕んでいただこうと思います…

はっ!?

か…

か…

な何を
ふざけた事…

これはまだ行った
ことがありませんでね…
体力的に普通の人には
務まらん実験ですからねえ

はっ!?

はっ!

はっ!

はっ!

!?

あいややめい…

どん

ひっ!

どん

いんや…

腫だわい…

はっ!



久々の人間狩りだったのに
つまんないなー

ふん…誰もいないじゃない…

テッ
テッ

!!

…まったくこの奴ら
いつの間になくなって…

ん…?

ああ…もしかして
おまえらのせいかな？

ここが
こんな有様だったのは…

デーモンガール・ハント
DAEMON GIRL HUNT



ふんそれがどうした
しかし…これじゃあ
結構稼がが減っちゃいますな

まあいいじゃねえか
新しい金ツルが目の前にいるだろ？

こいつは
いい稼ぎになるぞオ

……
あんまり舐めないでよね

人間如き束になっても
悪魔には敵わないんだよ



遅いッ

ぬ…ッ!!



丁度いい退屈してたところだ!!

力の差思い知らせてあげるよ!!



おお頭ッ!!

うろたえるな
相手は一匹だ
あれ使えば一発で—



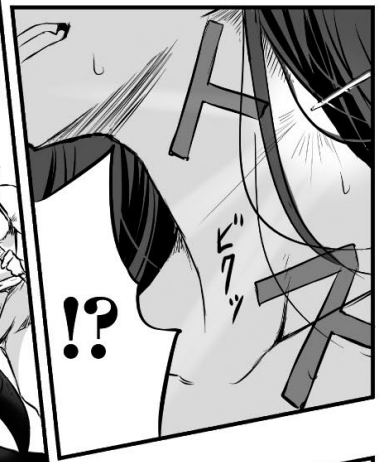
ふり危ねエ危ねエ
間一髪だったか？

なッ……!?

くたッ

ぶ頭っ!!
グダッ

あ……ッ!?



!?

く……あ……なに……
ち力が抜け……



え……

たじっ

特上の聖水を仕込んだ吹き矢だ
お前らにはよく効くだろ？



く……こんなのヒキョウだぞ……

はア？何言つてんだ
卑怯もへったくれもあるかよ

お……こいつは
思った以上の上物だな……



あん？
退治されるとでも思ったか

そんなもつたいねえ
殺さねえよ——殺さねえが……



なっ!?

は…?

痛ッ

…魔族やら
エルフやらの混ざり物の子は
高く買う物好きが多くてな

まあこれからずいっと子を孕んで
もらいまくりましょーってこった

特に悪魔なんて
すぐぶつ殺しちゃう
奴が多いから
希少価値が高エ



ややだよそんなの!!

なんで人間なんかの—



おいおい殺されないだけ
有難いと思えよ?

みるん

あ!?



よしそいじゃあ
俺からやらせてもらうぜえ

へへ…お頭
早くすませてくださいよ?



放せっ放せよお!!

ややだあ

チツ
暴れるな!!

おい追加だ
聖水



あ…



あ…



随分
おとなしくなったなア?

二回も投与すりや当然か

うっ…

はおまえら…

こんなことして
どうなるかわかって…



あっだめっ
大きいの入って...

あー!

ぐちっ

ギギッ
ぐちっ
ぐちっ

ギギッ

あー

あー
あー
あー

あー
あー
あー

あー
あー
あー

あー
あー
あー

あー
あー
あー

ベトレイア

The Betrayer

.....

ズー
ズー



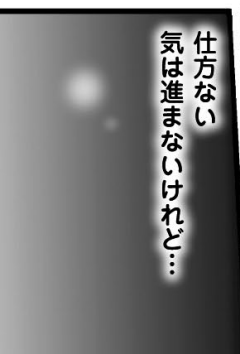
ね寝相が...



あ...ややだ

また...興奮
してきちゃった...

ムネ
ムネ...



よし...

う...っ

だめ...もう
抑えないと...

ふたなりの呪いにかかってから...
毎晩こんな調子ね...

でも射精が
できないなんて...

もう理性が限界たわ...

やっぱり性交しないと
解呪できないか...

調べてもそれくらいしか
わからなかったもの

...やるにしても

今後に支障のない方法を
とらないといけないわ

仕方ない
気は進まないけれど...

—数日後

くっ…

ルーシイ
こいつ厄介だよ!!

早く援護魔法をつ!!

今だ…!!



!?

な…っ!!

あ…?



本当はこんなこと
したくなかったのよ…

でも精神操作するほどの
魔法ともなると…
そう簡単にはかからないから…

戦闘中…
それも背後から

騙し討ちするぐらいの
シヨックがないとね…

—さてと

これでお前の
仕事は終わり…

報酬よ

それを持って
さっさと失せなさい

フン…
せいぜい仲良く
やるんだな…

…
悪く思わないでね
アンゼリカ…

呪いさえ解ければ
すべて元通りだから…

うう…

ガッ

ガッ



豊胸の秘薬 為ならば



おやお客さんかね？
生憎だが実験中ですね
今日はもう店じまい…



本当でしょうね？

この店に
豊胸の秘薬があると

…聞いてきたのよ

貴族様が何の御用で？

これはこれは…
エストラ家のリーゼ姫様
ではありませんか



この私がわざわざ
こんな店を訪ねてきたのよ
臨時開店にでも
しなさい



つるべた
大好き!!

冗談じゃないわ…
あんなロリコン伯爵と
政略結婚だなんて…

でも胸とか大きくなれば
好みじゃなくなつて
結婚も破談になるはず…っ



豊胸とは
ご冗談を…
リーゼ様はそのままで
充分魅力的ですよ
……っ



いいからさっさと
出なさい!!
このままじゃ勝手に
結婚させられそうなのよ!!



そそんな…
残念ながら在庫切れでして
薬の材料も今の時期には…
なんとかならないの？



ああ…あの伯爵ですか？
お家の事情はわかりませんが
災難ですなあ…
まあそういう理由でしたら
お譲りしたいところなのですが



ただ少々特殊な薬でして…
まだ実験段階なんです

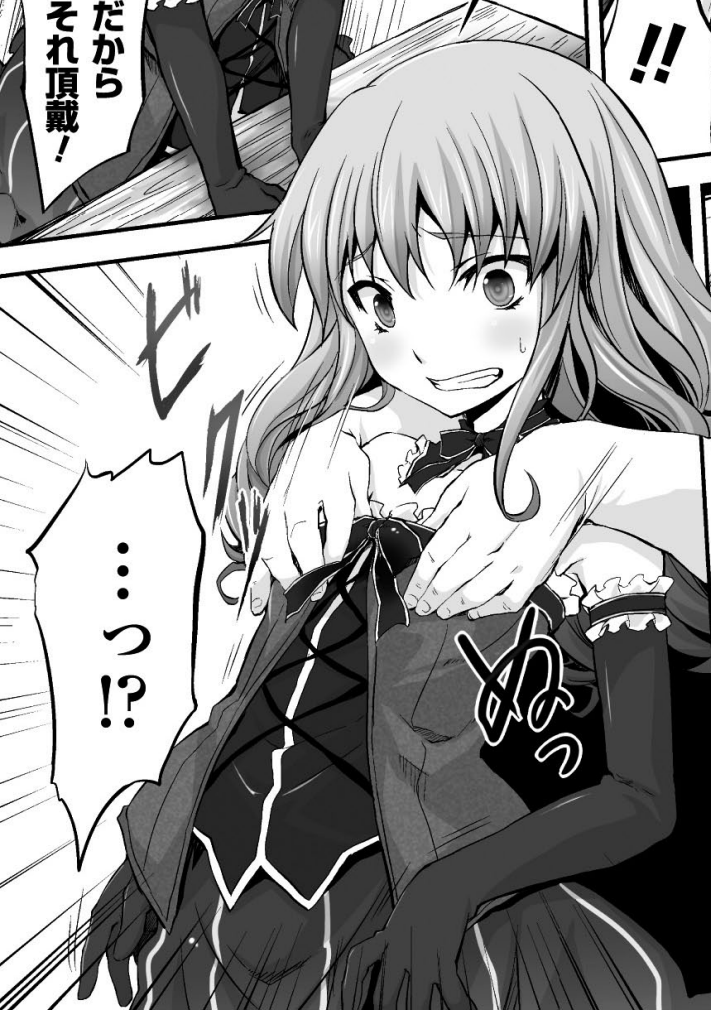
じ実験台にでも
なんでもなるわよ!
だから
それ頂戴!



…ふむ 最近新しく
開発した薬がありましてね

これなら豊胸効果も
あるでしょうな

ゴッ
ゴッ



…っ!?



そうですか?
それなら…



ありーせ様
ちよつと向こうを
向いてください

えっ…
何よ…



なっ 何をっ!!

な何してんのよお!?

あんな私を誰だと思って…

ああ…
暴れないでくださいよ



素人が塗ったりしたら…

大きくならないどころか
変な形になるかもしれない

いいんですか?

うっ…?
くっ…



この薬は塗り薬でして

患部に直接塗らないと
いけないんですよ

そそれなら

自分でやるわよ!!

なんであんななんかに
塗られなきや…



ああのロリコンと結婚
させられるくらいなり…

くっくっ…

仕方ないわ…

ささっさとしてよね…

では失礼して…

あっ

うう…ぬるぬるしてる…

気持ち悪いよお…

ひゅくっ

ぬ

ちゅっ

!?

な何…?

おっぱいが熱くなってる…

おっ

おっおっおっ!!

ぬゅ

ア

ア

ア

おや効いて
きましたかね?



さ
続けますよ

え!!



む胸…
大きくなった…!

ええ

この薬が浸透した部分は
感度に反応して成長する
効果があるんです



ふむ…どうやら人に対して
媚薬効果もあるようですな

動物実験では
わかりませんでしたよ

!?



ひあ!!

ちよちよと…
もう充分…



あっ
はあ

ややだあ
胸がまた大きく…



えっ
またですか？

ああ 今回の長期遠征に
私も召集されてな

不便を強いて
すまないが…

いつも通り
貞操魔道具をつけ
させてもらうぞ

あ…



んっ…

…できるだけ早く
帰ってきてくださいませね？
あなたとえっちできないの
とっても辛いですわ…

全くお前は…

魔道具で性欲は
抑えられているはずなんだがな

ツマカセ

では行って参る!!

留守は任せたぞ
我が妻エステリアよ

ポコ
ポコ

フゥ
フゥ

いってらっしゃいませー

—そして月日は流れ:

あ:
また遠征が延びたのね

はあ...

本当ならもう帰って
きている頃なのに...

んっ...!?

くら...っ

...最近魔道具の効果
薄れてきているわね:
性欲が漏れて
体が疼き始めてる...

どうしようかしら...

こんにちはー
いらっしやい
ませんかー?

コンコン

ん...?

あともうです
エステリアさん
そろそろお薬が
切れる頃でしたよね？

ああら
魔法使いの所の…

ちょっと
待っていてね

まますいわ…
今は男を見ると疼きが大き…

ええと…
いま足りないものは…

んふらふらしてますが…
体の調子でもお悪いですか？

えっ

あー！これ魔力が
切れかかってるみたいです

魔力の補充をすれば
大丈夫かと思えますよ

この魔道具が原因の
ようですが…

ちょっと
失礼して…

ん…

それなら補充を
お願いしてもいいかしら

このままでは
流石に辛くて…



あ…男…
触られ…

ももう駄目え…

ごめんさい
あなた…

これ以上我慢できない…

んっ!?

あはあ
美味しそうなのが
でてきたわ…♡

はっ
はっ

エステリアさん…
ややめ…

んう…
ふっ

ん…

ああ…

だっ…駄目です
エステリアさん
こんなこと
旦那様に知れたら…

ひさしがりの
男の臭い…
たまらないわ…

やめられるわけ
ないでしょう？
こんなに美味しそうな
おちんちんを目の前にして…

あなたが
いけないのよ
私の貞操魔道具
壊したりなんてするから

いけない子には
おしおきしなきゃね

あっ

Re Spawn

— 魔女リリーの根城



さっ…
この娘達で最後かな？

そろそろ最後の
仕上げとしようか

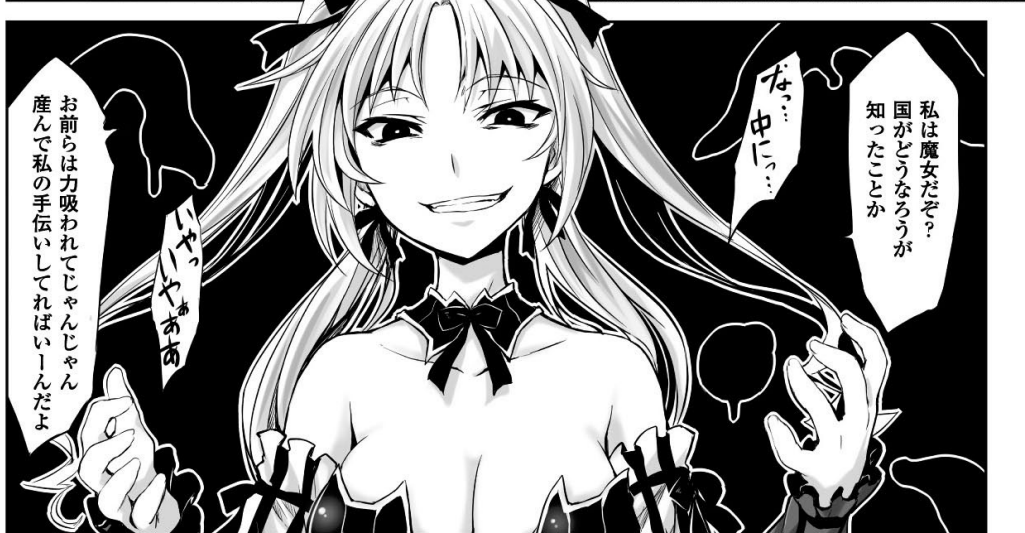
お♡

うまあ

やああ♡

おちゅっ

おっ





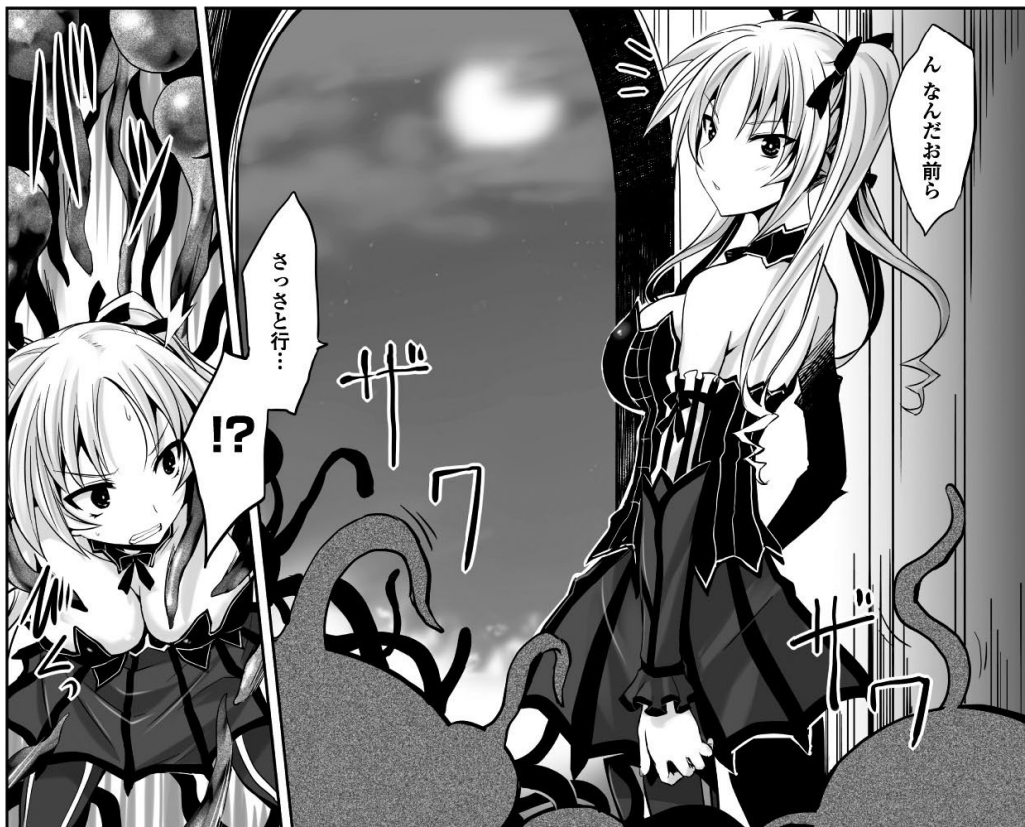
「国中の女を襲い 数を増やし 敵対するものは全て 絶滅させなさい」

さあ行け下僕共



ふふ捕った捕った♪

これだけいけば 国を飲み込むには 充分過ぎる よーし



んなんだお前ら

なにがなに行...

!?



さあそろそろ村に着く
もう大丈夫よ

おお
レテイシア様!!

勇者様が
戻ってこられた!!

せん

メリネアも一緒だ!

少ないですが...
これは心ばかりの
お礼でございます

あああ...有難う
それよりも村長

魔物との戦いで
手傷を負ってしまって...
厄介な淫魔の呪いの傷なんだ

あ...有難うございます...
勇者様...

治療するのに聖水を
いただきたいのだけど

救いのない
世界





ほら
もう行きなさいメリネア

疲れているだろう
ス:

ううん...



あ...



おっとまさか勇者サマが
村人に手をあげるなんて
ことはないよな

...

それじゃ行こうか
勇者サマ



なんだ抵抗しないのか?

くっ...
駄目だ...

振り払おうにも
呪いのせいで力が出ない...

実はやりたかったんだろ
とんだエロ勇者だな

この...下衆共...
こんなこと...
さつさと済ませなさい...っ

おお怖い怖い



んじや遠慮なく♡

うっ...

んじや遠慮なく♡

うっ...

なっ...

だ誰が...

...こんな...耐えてやる...

...

イってなんかやるもんか！

ほら勇者サマ
戦いの事なんか忘れて

気持ちよくなっても
構わないんだぜ



!?

おつようやく
気持ちよくなって
きたかい

そうか？なら
もっと激しくしても
いらよな

ししまつ...
呪いのせいで感じ
やすく...!?

あつ
ち連つ...

あつ!?

やあつ

だだめつ
こんな激しくうう...

た耐え切れな...
いイっちゃうううう



おお…
よく撮れてる

よし今度は
笑って—

?



おーいリン
こっち向いて—



あ…?

しゃ写真…
撮られ…?

アッ!
アッ!



はいチー…

ぶっ

いやああああっ

ハメ撮り
療法



しや写真撮られると
魂とられるのよ!?

カメラは須く
破壊すべきだわ!!



…そついうわけで
なんとか
ならないかな…



よしわかった…
荒療治になるかもしれないが

なんとかしよう
じゃないか

おお!?



とんだトラウマ
持ちの彼女だな…

うっふふ…

子供の頃に迷信
刷り込まれたらしくてね…

写真部のお前なら
治す方法思い付かないか?

ハッ!?

またまた私
暴走して…



しばらく
彼女借りるぞ?

え

ちよちよと

ああ
任せたよ



カメラのトラウマ
克服したくないの？

いや
したいわよ…

ポン

大丈夫こいつのことだ
うまくやってくれるさ



ちょっと
勝手に決めないでよ!!

ガシツ

ん？



…この際 治療
するのはいいけど…

私いつまで縛られたままなの？

コレほどいてくれなきゃ
何もできないわよ

ギシッ

ギシッ



じゃあがんばれよー
後で迎えに来るからな

ガイッ

あっ…



…さて
早速はじめようか
リンちゃん？

びくっ

…



荒療治って
言つたらろう?
まあ悪いようには
しないって



さっ 撮影!
私を!?

勿論暴れない
ようにだ
これから撮影するわけだし



はぁ...
耐えられなかったら
言ってくればいい



早速
はじめようか

もう
随
ちろ
しめ
ない

【新装版】

魔術師 リーゼロッテの 受難



小説 NOVEL **うえだ 上田ながの**
挿絵 & 漫画 ILLUSTRATION & COMIC **どうせん 冬扇**

リーゼロッテ・リ・ファイラスが弟子であるコール・サイラスと共に古代遺跡「リオンポリス」に赴いたのは、魔術師協会から遺跡の調査を命じられた為である。

現在より五〇〇年以上前、栄華を誇ったリオンポリス。高度な文明を誇り、かつては大陸全土を掌握していた巨大都市だ。だが、その栄華は長くは続かなかった。

「ある時古代都市の人々は急に狂乱し、都市の住民同士で血みどろの殺し合いを行い——遂には自壊してしまつた……。詳しい記録は残っていないので、人々が何故おかしくなつてしまつたのかという原因は不明……。一体何があつたんでしようね？」

崩壊したリオンポリス——かつては大陸でも最大の都市だつたはずなのだが、現在は朽ち果てた神殿のような遺跡が僅かに残っている程度である。

そんな廢墟を見つめながら、コールがクリクリとした瞳をキラキラ輝かせつつリーゼロッテを見つめてきた。

リオンポリスが何故滅びたのか？ 一体この地で何が起きたのか？ それが氣になつて仕方がないらしい。

「リーゼロッテ様はどう思われますか？ リオンポリスに起きた災厄とはどのような出来事だと思いますか？」

「……私達はそれを調査しに来たんです。何が起きたのか……私が知るはずありません」

左右おさげに結つた黒髪と、大きく胸元が開いた魔術服の間から覗き見える掌には収まりきりそうにないほどの乳房を揺らしながら、リーゼロッテは切れ長の碧い瞳を開けると首

を左右に振り、弟子に冷たい言葉を返す。

正直リオンポリスが何故滅びたのか？ なんてことに興味はない。ここに来たのはあくまでも仕事だからだ。

「それはそうですね。よし！ それじゃあ頑張つて調査しましょう！」

が、コールは冷たくされても落ち込んだ様子を見せはしない。それどころかニコニコ笑顔を浮かべながら、はしゃぐ子供みたいに遺跡へと一人走つていった。

（本当に元氣ですね。あの体力どこから来ているのでしょうか？）

弟子の後ろ姿を見つめながらはあつとリーゼロッテは肩を落とす。

「何やつてるんですかリーゼロッテ様！ ほら、早く来て下さいよお！」

そんなリーゼロッテに向かつて、コールは無邪気にポンプンと手を振つてきた。

「……はいはい」

フウツとため息をつきながら、僅かではあるけれど歩行速度を上げる。

（はあ……私も丸くなつたものですね。というより……何故かコールには逆らえませんが。弟子なんかいらな思つていたのに……）

一年前——。

「弟子……ですか？」

*

魔術師協会の研究室にて論文を仕上げている最中、室内に二人の魔術師が入ってきた。

一人はロイド・バーキン——魔術師協会東方支部会長である。魔術師としての才ははつきり言つてほとんどの人物だ。研究などの実績もない。けれども権力者に取り入ることが上手く、金と人脈のみで現在の地位を手に入れた。はつきり言つて軽蔑に値する存在である。その上、ロイドは自分に対してイヤらしい視線を向けてきたりもしていた。胸元や首元を舐め回すように見つめてくる。正直顔を見るだけでもおぞましい。噂話だが、ロイドは自身の地位を利用して多数の愛人を囲っているという話も聞いたことがある。中には無理矢理金の力で親を買収し、自分のものにした女性もいるようだ。まさに唾棄すべき人間だ。

そんなロイドが連れてきたもう一人の人物はこの親父とは対照的な、まだあどけなさの残る少年だった。年齢は自分と同じくらいだろうか？

「そう……弟子だよ。リーゼロッテ。君も協会所属の魔術師となつて十年。年若いとはいえ、そろそろ弟子を育ててほしい頃だ」

「それは……」

正直言つたと大迷惑だった。

確かに魔術師協会に所属して十年が過ぎていた。普通であれば弟子の一人や二人がいてもおかしくない時期だ。というよりも、普通は協会に所属して五年も過ぎれば弟子を取らなければならぬ決まりになつてゐる。

しかし、リーゼロッテにはこれまで一人も弟子はいなかった。

何故ならば、協会に所属して十年とはいふけれど、年齢ではリーゼロッテは協会所属のどんな魔術師よりも若かつたから。

何しろ協会に所属した時リーゼロッテはまだ十歳にもなつていなかったのだから……。

この若さのお陰で、いままで弟子取りは免除されてきていた。お陰で自分一人の自由気ままな生活を送っていたというのに……。

「……嫌です」

誰かと一緒に行動するなどごめんだった。

結局他人なんて自分の脚を引つ張る存在でしかないからだ。他人の面倒を見たところで自分にとってプラスになることなど何もない。

だからこれまで他の魔術師との共同研究なども行つては来ていなかった。自分以上に信頼できる人間などこの世には存在していないのだから……。

「残念だが拒否権はない。これは協会からの命令だ。協会に所属している以上、これは受けてもらうぞ」

語りながらロイドはリーゼロッテの胸を見つめてくる。ペロツと唇を舐める仕草に怖気が走つた。

こんな奴の命令など死んでも聞きたくはない——とは思ふのだけれど、協会からの命令と言われてしまえば引き受けざるを得なかつた。

好きな研究をすることができるとも、協会の後ろ盾があるからである。

もし魔術師協会に所属していなければ、いかに百年に一度の大天才と呼ばれるリーゼロッテでも明日の生活に困ってしまうこと請け合いだ。それくらい魔術研究には金がかかる。

「……分かり……ました……」

「分かってくれたか。では頼むぞ」

ロイドは好色そうな視線をこちらの肢体に向けつつ、少年を残して部屋を出ていった。

「……………」

少年と二人きり——この状況は流石に気まずい。正直何を話せばいいのかさっぱり分からなかった。

「コール||サイラスといえます！ 僕はリーゼロッテ様に憧れて魔術師になろうと決めました。だから……だから本当に嬉しいです。リーゼロッテ様の弟子になることができます、僕は本当に光栄です！」

「……………」

自己紹介に対してもなんと答えればいいのか迷ってしまう。自分以外の他人なんてどうでもいい存在でしかない。他人との付き合いなんかしたくはない——そう思っただけで育ってきたのだから無理もなかった。

（無視しましょう）

だから結局そう心の中で決断を下した。憧れられたってこれっぽっちも嬉しくない。ただ邪魔なだけだ。だから徹底的に無視しよう。こいつが憧れなんか捨て去って、もうついて

いけない。弟子なんかやってられないと出ていくくらいに……。

「よろしくお願います！」

ニコニコ笑顔のサイラスと、人形のように無表情のリーゼロッテ。

それが二人の出会いだった。

*

調査開始から三日目——。

「ふう……。取り敢えず今日のところはこれくらいにしておきましょうか」

「あ……は、はい」

日も落ちてきたので本日の調査活動を終了する旨を伝えると、コールはどこか冴えない様子で頷いてきた。

「……………」

そんな弟子の様子に小首を傾げる。

出会ってから一年——最初リーゼロッテは自分で決めた通り、この弟子のことをひたすら無視し続けた。そうすればいつか自分の前から消えてくれるだろうと思っただけ……。

しかし、彼はそれでも決して腐ったりはしなかった。それどころか常に一生懸命リーゼロッテの跡を追い、遂には「あ、ここはこうした方がいいと思いますよ」などと口を挟んでくるほどになっていた。

いや、それだけじゃない。研究以外でも彼はいつも積極的
にリーゼロッテに話しかけてきた。今日何をしたらどうか、昨日はこんなことがあったとか。

そんな日常を過ごしている内に、リーゼロッテは自分が子供だったことを悟った。

コールは頑張っているのに、自分はそんな彼から逃げている——あまりに恥ずかしくて、情けない。

以来、リーゼロッテはコールと会話を交わすようになった。自分の知識を彼に教えるようになった。会話馴れしていないので、凄くぎこちない言葉遣いだったけれど……。

それでも、彼との会話をいつしか純粋に楽しめるようになっていた。

そのように頑固だった自分を変えてしまいうくらい普段元気な彼とは思えないくらい、なんだか落ち込んでいるように見える。いや、何もこれは今日に限ったことじゃない。調査開始以来、彼はずっとこんな調子だった。

お陰で調査の進捗状況はあまり芳しいものではない。一体何があつたのだろうか？

「彼……どうかしたんですか？」

現地にて雇った調査員達もリーゼロッテと同じような疑問を抱いたらしく、小首を傾げながら尋ねてくる。

「……さあ、私にも分かりかねます。ですが、このままだとちよつと調査にも支障が出かねませんので、私の方から聞いてみますね」

「分かりました。それよりリーゼロッテ様。今夜のお食事は何がいいですか？ リーゼロッテ様の為だったたらどんなリクエストにだって応えてみせますよ」

キザッたらしい微笑みを調査員の一人——確か名前は——

アスハスが向けてくる。初日から妙になれなれしい調査員で、正直苦手なタイプだった。少し前の自分であれば完全に無視しているところである。

とはいえ、リーゼロッテもコールと一年付き合ってきたことでだいぶ人間関係に関して丸くなっており、

「……ありがとうございます。楽しみにしていますね」
一応表面上だけは笑つてみせる。

「……………」

すると何故かコールの表情がより暗くなっていった。

(どうしたのですかコール？)

本当に何を考えているのだろうか？

辛そうなコールの姿——あまり見ていたくはない。何故かズキッと胸が痛くなるのを感じた。

「ちよつといいですか？」

だからその晩、キャンプにて夕食を食べ終えた後、しきりに「少しお話しませんか？」となれなれしく話しかけてくるアスハスを無視して、リーゼロッテはコールに声をかけた。

「僕にですか？ でも、アスハスさんはいいのですか？」

「構いません」

「……分かりました」

取り敢えず誰にも邪魔されないよう、コールを引っ張ってキャンプから出ると、近くの泉に向かった。

「で、何があつたのですか？ ここに来てからというもの、コールの様子……どこかおかしいですよ」

そこで最近コールが冴えないのは何故なのかと理由を問う。

すると弟子は「そんなことありませんよ」と否定してきたが、簡単にハイソウですかと受け入れられるものではなかった。

「嘘を吐いても無駄です。私はコールと一年付き合ってきているんですよ。貴方の言葉の真贋くらい分かります」

「……………」

「私では頼りになりませんか？」

重ねて尋ねる。尋ねつつ、リーゼロッテは自分自身に驚いていた。

かつては魔術の研究にしか興味がなかったのに、何故かいまはそれ以上にコールのことが気になってしまふ自分がいたから。

この一年。師は自分であるはずなのに、コールから教えられたことは多い。人は一人だけで生きていくのではないということを、彼との出会いで知った気がする。

「あ、リーゼロッテ様笑いましたね」

「へ？ 笑う？ 私が？ そ、そのようなことありませんよ」

「なぐんで取り繕っても無駄です。ばつちり僕の網膜に記憶しましたから」

「む…………むむむ！ わ、忘れなさい！ 私は人前で笑ったりなどしません！」

「忘れろって言われても、無理ですよ。だって、いまの笑顔、凄く可愛いものでしたから」

「か…………可愛いって…………」

なんていう何気ない会話を交わすことの楽しみや喜びを教

えてくれたのも彼だ。

だからこそ、コールには暗い顔をして欲しくない。いつも笑っていて欲しい——それが本心だった。

真つ直ぐコールを見つめる。

しばらくそうしていると、やがて弟子は観念したように「分かりました」と呟いた後、何かを決心するように拳を握り締めながらこちらを見つめ返してきた。

「何があったのですか？」

改めて聞く。

「…………実はその…………僕は…………」

これに対しコールは何度か言い淀むような態度を見せた後「…………嫉妬していたのです」と告白してきた。

「嫉妬？ 何に対してですか？」

「…………アスハスさんに対してです」

「アスハスさんに？ 何故ですか？ 何を嫉妬するのでしょうか？」

「それは…………り…………リーゼロッテ様が僕だけでなくアスハスさんとも楽しげにお話をしていたことに対してです」

「…………どういふことですか？」

言葉の意味が理解できない。

「その…………僕はリーゼロッテ様と親しく話ができるのは僕だけの特権だと思っていました。リーゼロッテ様が笑ってくれるのは僕にだけだって…………。こんな馬鹿なこと考えてはいけないうち分かってはいるのですが、この気持ちを抑えることができなかつたのです。だって…………だって僕は…………」

「だって？」

問い返ししながら、リーゼロッテは自分の身に起きる異変に気がつく。

(どういうこと？ これはどうなっているのです？)

何故だろうか？ なんだか胸がドキドキと高鳴る。顔が火照り、全身が熱くなつていくのを感じた。

「僕は——り……リーゼロッテ様のこと……好きだからです！」

「……え？」

まるで考えもしない言葉だった。一瞬間の中が真っ白になる。

(好き？ コールが私のことを？)

聞き間違いだろうか？

いや、そんなことはあり得ない。だって、しっかりと心の奥底にまで彼の言葉は届いてきたから……。

(そう……そうですか……。好き……好きですか……)

何故だろう？

ただの言葉でしかないというのに、胸の中に温もりが広がっていくのを感じる。

(この気持ち……。そうか……。これって、私も……)

自分に対して「リーゼロッテ様に対して不埒なことを考えてしまい申し訳ありません」とコールは謝ってくるけれど、謝罪などこれっぽっちも必要なかった。

何故ならば——。

「謝罪などしないで下さい」

一言告げると共に、リーゼロッテは一步弟子に近づいた。

「リーゼロッテ様？」

コールが戸惑いの表情を浮かべる。そんな弟子に対して優しく微笑むと、そっと唇にキスをした。

口唇と口唇を重ねるだけの優しい口付け。

伝わってくる唇の柔らかさと温かさが心地よかった。

「……え？」

ポカンッとコールが口を開ける。

「……私だって……コールのことが……す……好き……。好きですよ」

ずっと一人で生きてきた。自分自身しか信じられるものはなかった。そんなこれまでの自分からは考えられないような恥ずかしい台詞だったけれど、嘘偽りない本心だった。

「リーゼロッテ様……」

「コール」

互いの名を呼び合い、もう一度抱き合う。ドキンドキンッという胸の鼓動が伝わってしまうのではないかと思うくらいに強く強く抱き締め合いながら、二人はどちらからともなくもう一度口付けをした。

*

(とんでもないことをしてしまったわ。は……恥ずかしい……)

翌朝、キャンプにて目覚めたリーゼロッテは、昨夜の出来事を思い出して頬を赤く染めた。

それはコールも同様らしく、朝食の時間に顔を合わせると、

彼は傍から見ても一目で分かるくらい顔を紅潮させ、はつきりと動揺を露わにした。

キスまでしかしていない。あの後すぐに二人は別れている。けれども、昨日までのようにコールを見ることができなかった。

彼を見つめているだけでなんだか恥ずかしくなってくる。けれどもそうして覚えてしまう羞恥さえも、なんだか心地よく感じた。

それは多分コールも同様であり、恥ずかしがりつつも彼の動きは昨日までより目に見えてよくなっていた。

お陰でこの日の調査はスムーズに進み、一つの遺跡の最深部はまだ到達することができた。

「これはなんででしょうか？」

アスハスが小首を傾げる。彼が向ける視線の先には祭壇のようなものが作られており、その上には一つの壺が置かれていた。壺の上には札のようなものが貼り付けてある。

「……強い魔力を感じます」

壺から溢れ出しているのは禍々しい魔力だ。おいそれと簡単に手を出していいものではなさそうだ。協会の指示を仰いだ方がいだろうか？

いや、しかし――。

今回の調査はあくまでも仕事でしかない。そう思ってきたが、実際何日も調査を続けていると、魔術師としての好奇心もわき始めてきていた。

協会に知らせるよりもまず先に、自分で調べてみたい。そ

んな欲求がムクムクと鎌首をもたげってくる。

「……それじゃあちよつと調べてみますね」

そんなリーゼロッテの心を読んだかのように、コールが壺に近づいていく。

「気をつけて下さいね」

「分かってます」

口元に笑みを浮かべながら頷く姿は、なんだかこれまでよりも頼もしく見えるものだった。

「……何かありましたか？」

「え？ あ……ええ？ べ……別に何もありませんけど」

慌ててアスハスの言葉を否定する。

「え？ あ……うわああああ！」

その瞬間だった――コールの足下の床が音を立てて割れたのは。弟子はバランスを崩して倒れる。その先にあるのは例の壺だった。

「コール!!」

コールが祭壇に当たる。これによって壺がバランスを崩し、落ちた。

ガッシャアアアンツ!!

音を立てて壺が割れる。

同時に、壺の中から黒い霧のようなものが噴き出してきた。

(あ……あれは一体なんなのですか?)

霧の正体はまるで分からない。けれども、とてつもなく鎌首感がした。まるで悪意の固まりのような霧だ。そんなものがコールに向かつていく。

「危ないっ!!」

瞬間——リーゼロッテは駆け出す。ただ見ていることなどできなかつた。

自身の身体に魔法をかけ、肉体強化を施し、凄まじい速度でコールに接近すると、いまにも霧に飲まれそうだった彼の身体を突き飛ばす。

「り——リーゼロッテさまあぁあ！」

自分の身に起きた出来事を悟ったコールが悲鳴を上げた。

そんな愛しい少年に対して「私は大丈夫です」と言うように優しく微笑む。

次の瞬間、肉体は黒い霧に包まれ、リーゼロッテの意識は闇の中に沈んだ。

*

「うつく……つうう……」

ゆつくりとリーゼロッテは瞳を開く。

「リーゼロッテ様！」

すると視界に青い顔をしたコールの姿が映り込んだ。

「コール？」

一体何がどうなっているのか？ 一瞬状況が掴めずきよんとしつづ、事態を把握する為に周囲を見回す。

場所はリーゼロッテの為に用意されたテントであることは間違いない。

では何故自分はテントにいるのか？

(そうか……そういえばあの時私はあの壺の中に隠れていた悪意の固まりを思いつきり吸い込んで……)

意識を失う前のことを思い出す。

「あくらら、悪意の固まりなんて言い方、失礼しちゃうの！」

「——え？」

聞き慣れない声が耳元に届いた。可愛らしい声。だというのに、耳にしただけで背筋がゾクゾクとするような悪意が含まれた声だった。

思わず身を起こし、周囲を見回す。

「ど……どうかされましたか？」

「どうかって……コールにはいまの声……聞こえなかつたのですか？」

「こ……声ですか？ それつて一体？」

コールは首を傾げる。

(聞こえていない?)

あんなにはつきり聞こえたのに……。

「ふふ、残念だけどソフィーの声は貴女にしかな聞こえないのよ」

♪ ソフィーは貴女の中にいるんだからね」

疑問を抱いていると再び声が聞こえた。どこから聞こえてきたのかも今度のはつきりと認識できる。

リーゼロッテは慌ててそちらへと視線を向け——硬直した。

(これは……)

「うふふふくなの♡」

そこにいたのはぬいぐるみ程度の大きさをした少女だった。背中には羽虫を思わせるような二枚のエメラルドグリーン美しい羽が生えている。髪の色は金。キラキラ輝く金色の瞳は、まるで猫のようにも見えた。



(…魔力寄生生命体)

リーゼロッテは一瞬でその存在がなんなのかを理解した。

肉体を持たない精神だけの生命体。魔力を持った人間に寄生し、その人間から魔力を吸うことで生きていく存在である。

魔力寄生生命体は宿主にしか見ることとも声を聞くこともできない。どうやらあの壺に封じられていたらしい。コールがまるで存在に気付いていないことから分かるけれど、どうやら寄生されてしまったらしい。

『魔力寄生生命体なんて味気ない呼び名は嫌なの。ソフィーのことはソフィーちゃんと呼んで欲しいの♥ もしくは妖精さんとかがいいの♪』

ニコニコと魔力寄生生命体——ソフィーは笑う。

実に無邪気な顔だ。一見すると無害な子供のようにしか見えな。

(でもそれは間違いです。この子からは凄まじい悪意を感じます。魔力寄生体の中でも特別質が悪い存在だと考えても間違いではないでしょう……)

実際ソフィーの小柄な身体からは、感じてはいるだけで鳥肌が立ちそうになるほどの悪意が滲み出してた。

『質が悪いだなんて酷いの♥』

どこまで正確なのかは分からないが、心まで読むことが可能らしい。

「だ……大丈夫ですか？」

「……問題ありません。それより、コールこそどこか辛かったりはしませんか？ 何か異常があるのであれば言っておき

い」

そう言ってニココリ笑う。

あまりコールには心配させたくない。だからいまは表面上は何もない風を装うことに決めた。

『あ！ ソフィーのこと無視するつもりなの！ そんなのヤダ！ ヤダヤダヤなのっ!!』

ソフィーが文句を言ってくるのが気にしない。

このような存在は無視することに限る。存在をないものとして扱いながら、祓う方法を探らなければ……。

そうリーゼロッテは決めた。

『僕は大丈夫です。それよりリーゼロッテ様。今回は申し訳ありませんでした。僕が不甲斐ないせいで……』

『そんなことはありません。ああいったことは誰にだって起きえます。ですからあまり気にしないで下さい。私は大丈夫ですから』

微笑みかけながら起き上がる。

「あ、ま……まだ休んでないと」

「大丈夫ですよ。これくらい問題ありません。調査も遅れ気味で休んでる暇はありませんから」

「ですが……」

「辛くなったら言いますから。私を信じて下さい」
「………はい。分かりました」

リーゼロッテは立ち上がり、テントを出る。

(遺跡を調べれば魔力寄生生命体を祓う術も見つかるかも知れませんが)

こんなところに
まだ用があるんですか？

散々調べ尽くしたから
もう何も無いはず…

もー

口答えするん
じゃないの

言うこと
聞かないなら
また痛くするの

ぐっ…

わわかった…
わかりましたからっ…

あそれなの
その石拾ってー☆

これ…
壺にはめ込まれていた
石かしら…？

そうそう

ソフィーと一緒に
封印されてた子

えっ!?

解放してあげるの
すっっかり忘れてたの

カツッ

カツッ





く空間が裂け…

!?



まさか
また寄生体が…

なにでくのの!!



なんて

おぞましい化け物…っ



なに?!

この子は
ソフィーの
下僕なの

ブルルルル...

女の子を襲って
孕ませちゃう
すごい奴なの☆

一緒になって
よく遊んだのよ

こいつに犯された
女の子の味はねー

絶望に塗れて
とっても美味しいの

久々の馳走なの
たっぷり落ちていってね!!

!!

あなたに抵抗なんて
許されないのよ

あ〜ダメダメ

私の魔法で
爆発四散
させてやります!!

こんな化け物っ





ほらあとは好きなだけ
感じまくっていいのよ♡

はっ…

あああ♡

しよ 障壁がなくても
このぐらいいっ…



我慢しないで
いいの♡
ロッチちゃんの
おまんこが喜んでるの
わかるのー☆

遠慮しないで
イっちゃって
いいの♡

だから…

んんん♡
しんおお♡

あああ♡

あゝ♡

やっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

アッ♡

あゝ♡

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>